

令和元年度 奈良県知事賞

「税金を『選ぶ』という考え方」

西大和学園高等学校 一年 岩山 悠馬

近ごろ、ふるさと納税に関する情報をよく見る。納める先や額が決まっている他の税金と違い、自分で選んだ自治体に納税できる制度だ。返礼品としてその土地の名産品などを受け取ることができるため、自治体ごとにさまざまな工夫を凝らしているそうだ。普段はなかなか手の出ない高級フルーツや牛肉などの返礼品から好きな自治体を選ぶ人のほか、自分が昔住んでいた土地や思い出のある土地、さらには被災した地域などを選び、応援したいという人もいるのだという。

このふるさと納税に関して、「ふるさと」をうたっているのにネットショッピングで使えるギフトカードを返礼品とするのは是か非かというニュースがあった。ネットショッピング用のギフトカードはふるさとに直接関係がないのだから、「地域の応援」という趣旨に合わない、という話だった。確かに、ギフトカードは単なる節税目的とも言えなくもない。ただ、僕はこの姿勢は、他の税金にあってもいいものではないかと考える。

納税は、国民の義務だ。学校を卒業したのちは働いて、決められた税金を納める。税を通してそれぞれ見えないところで助け合うというのが日本という国のシステムなのだ。しかし、税金を支払う時、嬉しいという人はほとんどいないのではないだろうか。僕の周りでも、「税金が高い」とか「税金は負担だ」という声を耳にすることがある。僕自身にとっても、消費税が上がるのは嬉しいことではない。それは、税金の存在が僕たちの生活から遠いからではないだろうか。「決められているから払う」というのでは、ただ給与や貯金が減るだけで面白くない。だから、税金を自分で選ぶというのはどうだろう。

例えば年間を通して合計20万円の税金を納めている人がいるとする。今のシステムでは、所得税・住民税・自動車税など、さまざまな税を決められた額納めているだろう。それを年間20万円のうちから、自由に選べるようにするのだ。例えば、住んでいる土地のために使いたいと思えば住民税に10万円、所得税に5万円、自動車税に5万円のように、その内訳を自分で決めるのである。

ふるさと納税が始まってから、あまり知られていなかった特産品が人気になった地域も多いという。納税される自治体側は、多くの税収入を得るためにPRに力を入れる。そして、納税する側は返礼品や地域の情報などをしっかり調べ、吟味する。そのサイクルは、他の税金にも起こりうるのではないかと思うのだ。「義務だから」と流すのではなく「自分の住んでいる街はこんな取り組みをしている地域なんだ」と納得して払う方が、納税する側のモチベーションも上がる。自治体や国など納税される側も、人々に選ばれるような取り組みについて、さらに深く考えていけるようになるのではないだろうか。納税のサイクルが新しくなれば、人々のあり方もさらに良くなるのではないかと思うのだ。